



初参加のひこぼしくん(左)と
おりひめちゃん(右)

初企画「グルメストリート」も大好評 平成OSAKA天の川伝説2015

7月7日

大川・天満橋(八軒家浜)～北浜

主催：平成OSAKA天の川伝説

実行委員会

共催：関西・大阪21世紀協会

約5万個の「いのり星®(LEDを光源とする光の球)」を放流し、天空の「天の川」を地上に再現する「平成OSAKA天の川伝説2015」が七夕の夜に開催され、約5万2千人が幻想的な光景を楽しんだ。

第7回となる今年は、枚方市の産業振興キャラクター「ひこぼしくん」と交野市の「おりひめちゃん」も来場。八軒家浜船着場で母子50人の七夕コーラス隊による「たなばたさま」の合唱ではじまり、多くの来場者が次々といのり星®を放流すると、約1kmにわたって青白い光が川面を彩った。船着場では、増田いずみさん(オペラ歌手)、安藤史子さん(フルート)、平山朋子さん(ピアノ)による七夕コンサートも行われた。

今回は初企画として、大川沿いの遊歩道をはじめエリア内各所に「グルメストリート」を展開。フジオフードシステムによる屋台をはじめ、「天の川カクテル(BAR CADBOLL：大阪・天満橋)」や「天の川☆スタードーナツ(ルポンドシエル：大阪・北浜)」など約15店が、七夕限定メニューやオリジナルグッズを販売し好評だった。

かつて難波宮が営まれた頃、天満橋一帯は、国の平安と疫病退散を星に託して願う地だった。平安京に遷都されて以降も、天皇は当地で行われる「八十島(やそしま)祭」に使者を遣わし、大海原の生命力を身につけたと伝えられている。こうした国生みの祭祀や星祭りの伝説にちなむこのイベントは、大阪城フェスティバル(7月1日～)のキックオフイベントとして、大阪の夏の風物詩となっている。



大阪を代表するカクテルを目指し、
林杜一さん(BAR CADBOLL)が
考案した「天の川カクテル」。
会場でも大好評だった。



ルポンドシエルの七夕限定
「スターナゲット(上)」と
「スタードーナツ(下)」(ともに500円)

1800年の歴史をもつ華やかな神事 おたうえしんじ 住吉大社御田植神事

6月14日

住吉大社(大阪市住吉区)

住吉大社に数ある神事のなかで、ひときわ華やかで古式に則った格式を受け継ぐ御田植神事(重要無形文化財)が行われ、御田植えや舞など総勢420人が奉仕した。

この神事は、今から1800年前、神功皇后が住吉大社に神田を設け、長門国(現在の山口県)から植女を召して御田植奉仕をさせたのがはじまり。明治時代に入って中断したが、大阪新町廓の芸妓が植女となって神事廃絶の危機を救った。現在は関西・大阪21世紀協会(上方文化芸能運営委員会)などが、大阪の誇るべき伝統文化・神事芸能として支援している。

今年は3500人が参列するなか、御田に設えた中央舞台で御稔女(みとしめ)による神田代舞(みとしろまい)や、田の周囲で無形文化財の住吉踊りなどが奉納された。こうした歌や踊りを奉納するのは、穀物に宿る力を増すためだといわれている。



御田植風景

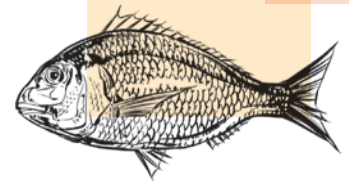


神田代舞を奉納する
御稔女の伊藤綾梨さん。
この舞は、1952年に御田植
神事が無形文化財指定を
受けたのを機に創作された。

21cafe — 話題提供と情報交換の交流サロン

関西釣り文化論

7月22日
中之島プラザ(アゴラシオン)
主催：関西・大阪21世紀協会



佐々木洋三 関西・大阪21世紀協会 専務理事

新たな文化創造のアイデアや人的ネットワークのきっかけをつくる「21cafe」。2007年にスタートして8年目を迎えた今年7月、当協会の佐々木洋三専務理事が「関西釣り文化論」を展開した。鯛釣りを中心に、その歴史や釣法、釣具の市場動向、近年の「里海計画」など、文献や動画映像、自身の釣行をもとに、興味深い話題を提供した。

佐々木専務理事は、日本の釣り文化は関西が先駆的な役割を果たしてきたとし、数々の史実を示した。そのひとつが、古代より天皇に魚介類を献上してきたのは鳥羽、越前、そして大阪湾の「御食国(みけつくに)」であったこと。朝廷が関西にあったためであるが、奈良の平城京跡から「多比」や「鯛」という文字と併せて、「鳥羽」などの地名が記された送り状と見られる木簡が出土している。また、古代より大阪湾南岸一帯の海は「ちぬ(茅渚)の海」と呼ばれたことを紹介。茅渚は和泉国あたりの古称で「茅(かや)の生えた野」の意味で、古事記にも記載されている。クロダイを「チヌ」と呼ぶのは「ちぬの海」の名産だったからだ、江戸時代の国学者・本居宣長は『古事記伝』に書いている。

さらに、「なにわ」は、一説には魚がたくさんいる庭と書く「魚庭(なにわ)」が語源であるとし、事実、大阪湾では食用の魚介類だけで約230種が確認されていると指摘した。大阪湾は古くは日本の漁業の中心地で、優れた漁労技術が対馬や房総半島に伝えられた。房総半島にも白浜や勝浦という地名があるのは、雑賀崎(和歌山)の漁師たちが東に釣り進み、紀伊半島に似た房総半島を見つけたからだという。佐々木専務理事は、こうした関西の釣りに関する歴史的ポテンシャルを、しっかり記憶にと



どめておく必要があると強調した。

日本人にとって真鯛は「百魚の王」ともいべき魚の象徴で、自身も「大鯛」を求めて青森(津軽)や対馬、屋久島など各地へ釣行に出ている。これらの地域の真鯛は体高があり、プロポーションも良い。そうした大物が期待できるのは、豊かな森林がもたらす栄養分で海が肥えているからである。

さらに、「鯛ラバ」と呼ばれる真鯛を疑似餌で釣る「ラバージギング」について、その仕掛けや釣り方を、自身が案内人を務める「新しいおとなのオフタイム(当協会のホームページで動画配信中)」で説明。韓国で起きている鯛ラバブームを紹介し、新たなクールジャパンの可能性を示した。また、竿やリールなどの釣具用品の市場にも触れ、2013年度の市場第1位が釣り竿(344億円)で、第2位が疑似餌(312億円)であることに言及。自身が追求する海のルアー釣りが、近年大きな市場に育ってきたことを感慨を込めて説明した。

最後に、大阪・関西の食文化と釣りは観光集客のテーマになるとし、海の生産性を高め、生物多様性を維持する「里海計画」の推進について紹介。とりわけ瀬戸内海では、漁業後継者の育成や島の活性化、ヨットハーバーの拡充など、レクリエーションを含めた総合的な海の利用が里海を生かし、漁業観光への道を拓くと述べた。



徳島県鳴門市での鯛ラバ釣り
「新しいおとなのオフタイム#2徳島県鳴門市後編」
協会ホームページで動画配信中



佐々木洋三(ささきひろみ)

1981年サントリー株式会社入社、マーケティング部門や経営企画部、社長室などを経て、現在、同社秘書室より当協会に出身。
「17食博覧会・大阪」総合監修、関西元気文化圏推進協議会幹事、平成OSAKA天の川伝説実行委員会副委員長などの他、株式会社シマノの釣りインストラクターを務め、マダイ・ラバージギング(疑似餌釣法)の第一人者でもある。